才十話

森の遊具は親以上の力

私が活動を実行している森では下界「社会」では、何ド物が作くれない！冒険遊具を行で作くっていく！

勇気をおしく遊具とあえば！考えながら遊ぶように作っておりましてく、

人間！どんなに怖い状況のなかであっても

！平常心で！臨機応変に考えて行動にうつせるための！遊びながらに精神力！思考力！集中力！勇気が出るような訓練となるようにとこたえております。

しかし！下界の親は「大人」この遊具が！ほどもに「与える力を」良く理解していない方がおります！

ですから！この遊具をどのような！意味があって作くっている事も考えていないようでござる！

たとえばですョ！

今自分の子どもが！空中迷路で体験をしていて！その時に子どもが！アッ！声を出して空中迷路に立ち止まりました！

と！いう事は怖い場所に来た訳である！だから！この場を！どうして前に進もうかと！！一生懸命に本人は考えているのです！ネ

今まで！何にもいわずに子どもの体験ぶりを！だまって見ていたのが！

「何にをしているの！早く渡りなさいよ！

その所は！このようにしてごらんよ！と助け舟を出している。

このような！親の行動が今の社会を作りあげているのでございます！

本来なら！この森の遊具の意味が！わかっていれば！また親自身が！もう少し深く考えて見ていれば！

「この子は！いまどのように！すれば良いのか考えているのね！だから私が口を出すのはいかんネ！と！」なるのですが！

ほとんどの親は、我が子の可愛いんうだわ、の気持が先に出ます。ですから、この行動は、子どもの為に思って、の愛情ではありません。

「教育」これが、子どもを「あまえ」始まり。あり、この後、子のようなまは、困った時は誰かが、助けてくれから、とか、自分は考えなくなる。

私は、このような大人の行動を見た時は、いま、口を出したらいかん、子どもは今考えいるではないか、と大声を出します。

このようにして、子どもは、遊びの中から考える力、という人生の中で大切な小道具をしん、つくっも培かっていき、頭のなか、あるいは、心の中の引き出しと、いいますか、その中に、しまっておき、そして必要な時に、その実践体験して、しまっておいた小道具を引き出して人生に役に立てけるのです。その親のことばですが、帰えられる時に、先ほどは海ませんでした、あのようなことは

まったく、考えもつきませんでした。良い体験になりました。」

と、いうておりました。

現在の下界の親は、自分中心に、自分の都合にあわせての、教育と、いいますか、躾を「押し付けている」ように見えますナ。

親は、我が子を大事に育てていきたいなら、心を大きく、ひらき、子どもには「ドロンコ遊びをさせ、野山でのびのびと遊ばせて、体には少々の傷をつける位の遊びをさせるのが必要である。

ですから、小さい時から、勉強、、、の押しつけの躾には、必ず弊害が出てきますぞ。

野山で、遊びながら体感し考えていく楽しさを身体で覚えていく事が、子どもに、とっては、学問にも集中力を、くわえて自から、考えて適切な答を出せるようになります。

ですから、森は（仙人の森）下界の全ての大人たちが教えられない人間としての土台の生きている教科書となる事を下界の大人は絶

対に忘れてはいけませんぞ。

いつでも気軽るに！おいでくだされ。

TELでもいいですぞ。。。

20×20